

# 民営樹木葬墓地パンフレットの訴求内容分析

## —納骨堂との比較から—

岩堀 風月

HS30-0011D

### 目次（節・項は省略）

#### はじめに

#### 1 章 研究の背景と目的

#### 2 章 「葬り」に関する先行研究

#### 3 章 日本における樹木葬と納骨堂

#### 4 章 パンフレット内容分析

#### 5 章 考察

#### 終わりに

### 1 はじめに

現在、日本の墓は大きな転換期の最中にある。家族構造の大きな変化やグローバル化した人口移動により、代々家族間で受け継がれてきた「家墓」が存続の危機を迎えている。その中で 1990 年代、今から約 30 年前に血縁関係によらない合葬式共同墓や散骨、樹木葬といった新たな葬法が次々に誕生した。そして今後も人口減少と未婚化による承継者の減少、死者の増加が予測されており、これら新たな形態の墓は益々需要が高まると思われる。

### 2 研究の目的と方法

本研究は新たな葬法の中でも樹木葬に焦点を当て、それがどのような理由から求められるのかを明らかにすることを目的とする。樹木葬は誕生から 20 年余りしか経過していないにも関わらず、理念や目的、形態が当初と現在で大きく乖離している。当

初は焼骨を土に直に埋葬し樹木を植えていたのが、現在は「焼骨を骨壺に納めたまま地中に埋め、そばに花をささやかに埋めるだけ」というように自然との接点が少ない形態が都市部で見受けられる。筆者には現在の形態が「屋外にある納骨堂」のように思われたため、納骨堂と比較して調査を行った。

方法はテキストマイニングのためのフリーソフトウェアである KHCoder を用いた墓地パンフレットの計量テキスト分析と、内容分析とした。地域は東京都と神奈川県に絞り、樹木葬墓地と納骨堂それぞれ 13 ヶ所を分析した。

### 3 「葬り」に関する先行研究

墓として一般的な「家墓」（家族の焼骨をカロートに合葬し墳墓に家名を刻むもの）の観念は明治時代に成立した。もともとは「祖先祭祀」の理念のもとにあった。それは直系家族制により担われていた。

第二次世界大戦後、「脱家」現象とも捉えられる核家族化、個人化などの家族構造の大きな変化が起こった。「家墓」も存続は困難となり、1990 年代の墓の変容に繋がった。

槇村（2004）によると 1990 年代の新たな墓の方向性は「共同化」「無形化」

「有期限化」という言葉で表すことができる。

## 4 日本における樹木葬と納骨堂

樹木葬は当初「里山保全」を理念とした自然志向の埋葬方法として 1999 年に岩手県一関市の祥雲寺で始まった。これに代表される、許可を取って山林を墓地へ地目変更し造成するタイプは「里山型」と呼ばれる。一方、現在は既存の霊園内に新しく造成する「公園型」と呼ばれる形態が広がっている。現在は「公園型」が主流となっている。多くは承継者を必要としない。

納骨堂は戦前期に誕生し、高度経済成長期以降に本格的に展開され、現在各地に広く設置されている。祭祀の承継がなされない場合は合葬するシステムとなる場合が多い。

## 5 パンフレット内容分析

KHCoder を用いて取り寄せたパンフレットのテキストを分析した。まず樹木葬と納骨堂それぞれ出現の多い上位 50 語を比較し、おおまかな傾向を掴んだ。その上で、「ポジティブな意味合いでメリットを伝える語」「懸念を取り除くような語」「感情に訴えかける情緒的な特殊な語」という 3 つの面で、特徴的な各 2, 3 語を選択し比較した。

その結果、樹木葬墓地パンフレットからは永代供養が前提となっていること、個別埋葬を求める購入希望者が一定数いることなどが分かった。自然をイメージさせる語を用いつつ、現実的な問題に言及するような語も多く見られた。

納骨堂墓地パンフレットは永代供養はもちろん、お参りの簡便さやアクセスの良さといった利点に加え自然の豊かさをアピールしており、人々が納骨堂にも「自然」を

求めていることがうかがえる。

また墓地使用の期限があるものの、石の墓標を持ち個別埋葬の期間が設けられている樹木葬墓地が多く見られ、前述の槇村の方向性からのずれが起こりつつあることが分かった。

## 6 考察・終わりに

全体的な傾向を鑑みると樹木葬墓地には「自然」を、納骨堂には「利便性」を、購入希望者が求めていることが考察できる。一方で樹木葬は「自然との離隔」、納骨堂は「自然との接近」が起こりつつあるのではないかと筆者は推測する。急速に変化する樹木葬において何を以て「土に還る」のか、何を以て「樹木」葬なのか問われている。またこれらの変化に対応する新たな分析の枠組みが求められている。

## 参考文献（抜粋）

- 樋口耕一, 2020, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して第 2 版』ナカニシヤ出版。
- 井上治代, 2003, 『墓と家族の変容』岩波書店。
- 槇村久子, 2004, 「家族構造と都市構造の変化における死生観と墓地の研究—都市型共同墓所と新たなコミュニティの形成へ・二つの事例研究」『研究紀要』京都女子大学宗教・文化研究所, (17) : 87-108.
- 森謙二, 2000, 『墓と葬送の現在—祖先祭祀から葬送の自由へ』東京堂出版。
- 内田安紀, 2017, 「現代日本における葬送と自然—『自然に還る』というイメージをめぐる」『宗教と社会』23 (0) : 15-29.